

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520482

研究課題名(和文)主観性に基づく言語類型論と動詞/衛星枠付け言語類型の相関：接触動詞を中心に

研究課題名(英文) A Possible Correlation between Linguistic Typologies of Subjectivity and of Verb/satellite-framed languages: With Special Reference to Contact Verb Constructions

研究代表者

小熊 猛 (Takeshi, Koguma)

宮崎大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：60311015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：被行為者とその身体の二項を取る接触動詞構文が独語・露語など衛星枠付け言語に広く見られ、西語・日本語など動詞枠付け言語に見られないことに着目し、構文と言語類型の相関性を検討した。動詞枠付けの仏語や韓国語には一部当該構文らしきものが認められた。当該構文は「利害」という主観的意味が伴うことから大きく受益・被害構文と捉え直し、日本語・韓国語・アイヌ語の機能的対応構文の概念的分析に基づいて動詞/衛星色付けの分類を試みた。日本語は「利害」を徹底して補助動詞で言語化する動詞色付け言語、アイヌ語は動詞接辞で言語化する衛星色付け言語の傾向を示す。韓国語は基本的に動詞色付け言語ながら、一部衛星色付けの色彩を示す。

研究成果の概要(英文)：Based on the observation that Contact-Verb (CV) constructions with patient and its body part as arguments are common in S(atellite)-framed languages (German/Russian) but uncommon in V(erb)-framed languages (Spanish/Japanese), this study examined a possible correlation between the V/S-framed language typology and the constructions. French and Korean, V-framed languages, were shown to have analogues to CV constructions, thus seemingly counterexamples to the correlation hypothesis. Viewing the relevant expressions as benefactive/adversative constructions because they have the subjective meanings of benefit/harm, the study made a conceptual analysis of Japanese, Korean, and Ainu functional counterparts and advanced a typology of V/S-colored languages. Japanese is a V-colored language that encodes benefit/harm in verbs, while Ainu is an S-colored language with benefit/harm encoded in verbal affixes. Korean, basically a V-colored language, also manifests some S-colored language traits.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：事態把握 逆行構文 直示性 動詞枠付け言語 衛星枠付け言語

1. 研究開始当初の背景

(1) 動詞／衛星枠付け言語と構文

英語には、身体部位を目的語にとる(a)に示す構文に加え、被行為者と身体部位の二項を取る(b)で例示する、いわゆる「所有者上昇構文」(S+V+被行為者+前置詞+身体部位)が見られるが、後者の対応構文は日本語には存在しない。

a. She slapped my face.

b. She slapped me on/across the face.

この所有者上昇構文が独語・露語・マレー語などに見られる一方で、日本語と似ているとされる韓国語にも観察されないという予備的調査結果を得た。

所有者上昇構文に現れる前置詞は一般に接触行為の〈着点〉(e. g. *on*)を表すが、(b)の例に見るように〈経路〉(e. g. *across*)を表す前置詞も現れる。このことから、この構文の事態把握には、身体部位(e. g. 手のひら)の経路移動が関わっていると予測した。

経路移動との関与を踏まえ、移動構文に関する類型論(Talmy 1991, 2000 他)との関連の検証を試みた。Talmyは、移動構文に関し、〈経路〉が動詞で言語化されるか、その他の要素で言語化されるかによって、それぞれ動詞枠付け(verb-framed)言語、衛星枠付け(satellite-framed)言語に分類する類型論を提唱している。この類型論に照らすと、所有者上昇構文が確認される英語・独語・露語・マレー語はいずれも衛星枠付け言語と分類される一方で、対応構文が観察されない日本語・韓国語は動詞枠付け言語と分類されるという事実に着目した。

行為連鎖における身体部位の経路移動表現についても、「動詞／衛星枠付け」類型が有効なのかという観点からの研究は見あたらない状況にあった。

(2) 主観性と構文

(a)のタイプは事態を客観的に言語化している表現であり、(b)の所有者上昇構文は被行為者そのものへの影響(受益ないしは被害)に着目する主観的表現であるという先行研究の指摘もあった。

主観性・主体性の観点から、中村(2004, 2009)は、脱主体化の程度による類型を提案し、日本語は状況内に視点を置く傾向の強い状況密着型の主観性・主体性の高い言語であり、対照的に英語は状況外視点をとる傾向の強い脱主体化が進んだタイプ言語と分析されるとし、脱主体化の程度スケールにおいて日英両言語は対極にあると指摘している。

主観性・主体性が高いと指摘されている日本語は、(i)客観的な言語化パターン(a)がある一方でなぜ(b)の所有者上昇構文が存在しないのか、(ii)所有者上昇構文の代わりに担う機能的対応構文が観察されるか、当該構文と主観性の関係を探る必要性が生じた。

2. 研究の目的

「動詞／衛星枠付け」類型、主観性・主体性に基づく類型、所有者上昇構文の有無すべてにおいて、日英両言語は対照的特徴を示す。これを踏まえて、本研究では以下に示す研究目的を設定した。

- (1) 移動構文に基づく動詞枠付け言語と衛星枠付け言語に大別する言語類型論が、その他の構文表現とも関わるのかを検証する。接触動詞構文を中心に取り上げ、行為連鎖における実働部(Active zone)の移動・経路の言語化パターンに同様の類型化が可能かを検証する。
- (2) 動詞／衛星枠付けという分類に、主観性・主体性に基づく類型で指摘されているような段階性・連続性が認められないのかを探る。
- (3) 動詞／衛星枠付けという分類と主観性・主体性に基づく分類の背後にある認知プロセスに迫る。

3. 研究の方法

- (1) 接触動詞を述部とする所有者上昇構文が、英語、ロシア語、マレー語といった衛星枠付け言語のみに偏在するのかを検証するため、日本語との類似するタイプの言語とされる韓国語、および動詞枠付け言語と分析されているフランス語について、機能的類似対応構文も視野に入れ、その有無を文献調査する。
- (2) 日本語の接触動詞を述部とする表現を整理し、機能的対応構文と見なし得る構文を探る。
- (3) 「動詞枠付け／衛星枠付け」の類型を踏まえ、日本語、韓国語、アイヌ語を取り上げ、より広い視点から「受益(恩恵)」「被害(迷惑)」を受ける参加者の言語化パターンの様相を、文献、コーパスデータ調査および聞き取り調査を実施して分析を試みる。

4. 研究成果

(1) 所有者上昇構文

動詞枠付け言語とされるフランス語では、被行為者が与格で現れ、身体部位が直接目的語で言語化される構文(e. g. *Il lui caressait la jambe droite.*)が生産的である一方で、「S+V+被行為者+前置詞+身体部位」の構文(e. g. *Jean caresse Marie dans le dos.*)も存在する(例文は小野正敦 2005 より一部改変)。また、「打撃動詞」「接触動詞」に加え、「捕獲動詞」についても、次の(a)(b)ように英語と平行的である。

a. Jean a attrapé le bras de Paul.

Jean caught the arm of Paul

‘Jean caught Paul’s arm.’

b. Jean a attrapé Paul au [par le] bras.

Jean caught Paul at+the [by the] arm

‘Jean caught Paul by the arm.’

(小野正敦 2005: 40)

韓国語についても、所有者上昇構文と見なし得る二重対格構文「S +被行為者+身体部位+接触動詞」が一部報告されている。

以上より、所有者上昇構文は衛星枠付け言語にのみ存在する構文ではないということが判った。

## (2) 機能的対応構文

日本語において、被行為者そのものへの影響（受益ないしは被害）に着目する主観的表現は被害受け身構文および逆行構文の下位類が担っていると論じた。

日本語には、被行為者が目的語で現れ、かつ身体部位が特定される能動文は存在しない。本研究では、被害受け身構文および逆行構文（「～てくる」構文）の一部に機能的対応構文として見なし得る下位類（e.g. 僕は彼女に顔をひっぱたかれた；彼女が顔をひっぱたいてきた）があることを本研究では示した。

「～てくる」構文に関しては、統語レベルで被行為者が明示されないばかりか、身体部位名詞の所有格表現も随意的である。にもかかわらず、直示性に根ざす補助動詞「てくる」の意味的貢献により、肯定文では「話し手」が、疑問文では「聞き手」がそれぞれ被行為者であると問題なく同定される。このような特徴より、機能的対応構文と見なし得ると論じた。

## (3) 動詞／衛星色付け言語類型

所有者上昇構文は「利害」という主観的意味を伴うことから、受益・被害構文を取り上げ、分析を試みた。日本語・韓国語・アイヌ語には受益構文と被害構文と見なし得る機能的対応表現が複数存在することに着目し、受益構文と被害構文それぞれが以下に整理されるような行為者主語と受領者主語という二類に分類され得ることを例証示した。

行為者主語受益構文：

- (日本語) V-*te-yaru*[*ageru/kureru*]
- (韓国語) V-*a*[(*y*)*eo*] *juda*, ACC ACC V
- (アイヌ語) V *wa kor*(*par*)*e*

受領者主語受益構文：

- (日本語) V-*te-morau*
- (韓国語) VN *badda*
- (アイヌ語) *enci/unci*=V

行為者主語被害構文：

- (日本語) V-*te-yaru*, V-*te-kuru*
- (韓国語) ACC ACC V

受領者主語被害構文：

- (日本語) V-(*r*)*areru*
- (韓国語) VN *danghada*[*majda*]
- (アイヌ語) *enci/unci*=V

韓国語は、二重対格構文(ACC ACC V)並びにV-*a*[(*y*)*eo*] *juda* 構文のように、利益・被害の受領者を目的語位置で言語化する傾向が強いに対して、日本語では利益・被害の受

領者を主語位置で言語化するか、もしくは受領者が話者に相当する場合には、それを表現しない傾向が強いことを実例によって示した。

更に、個々の受益・被害構文が(脱)主体化と人称制限の程度という点で異なることを示した。日本語と韓国語の受益・被害構文では、1人称から3人称のいずれも行為者、受領者の双方になり得るのに対して、アイヌ語の受益・被害構文では、受領者が1人称であるという強い制約が働く。その上、日本語は、受領者が話者・聴者の領域に位置する人物である場合に用いられる構文と、行為者が話者・聴者の領域に位置する人物である場合に用いられる構文とを区別する。

これら記述的な分類と一般化に基づいて、そこから更に抽象性・一般性の高い類型論的な観点を導くことが可能になることを論じた。Talmy の verb-framed の言語と satellite-framed の言語という区分を参考にし、受益・被害という影響が動詞語幹とその接辞あるいは動詞句と副詞句のどちらで言語化される傾向をより強く示すかに応じて、verb-colored 言語と satellite-colored 言語という分類を存在し得る類型論的な区分として提案している。これら二つの区分に相関性が見出されるかどうかという点について論うのは時期尚早であることを認めざるを得ないとしながらも、そうした可能性を追求することには十分な意義があることを論じた。そうした観点に立つことによって、受益的出来事と被害的出来事との概念化の基盤がどんなものであるかに加え、それが言語の構造や意味・機能にどのように現れるかを明らかにする有効な手立てとなり得る。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

- ① Izutsu, Katsunobu & Takeshi Koguma, “Favorable and Unfavorable Effects: A Typology of Benefactive and Adversative Constructions in Japanese, Korean, and Ainu” In Mike Borkent, Barbara Dancygier, and Jennifer Hinnell (eds.), *Language and the Creative Mind*. CSLI Publications. 119-136, 2013 (査読有)

[学会発表] (計 6件)

- ① Koguma, Takeshi. “Have a N (verbal-stem) Periphrastic Verbal Construction: A Reference-Point Model Approach” ICLC12 (International Cognitive Linguistics Conference),

University of Alberta, Alberta, Canada,  
June 26, 2013.

- ② Koguma, Takeshi. “Body-part Active-zone Specification Construction in English: With Special Reference to Inverse Construction in Japanese” UK-CLC 4 (4<sup>th</sup> UK Cognitive Linguistic Conference), King’s College, London, UK, July 10, 2012.
- ③ Izutsu, Katsunobu. & Takeshi Koguma. “Favorable and Unfavorable Effects: A Typology of Benefactive and Adversative Constructions in Japanese, Korean, and Ainu” CSDL11 (Conceptual Structure, Discourse & Language), University of British Columbia, Vancouver, Canada, May 18, 2012.
- ④ 小熊 猛, 脱主体化と文法化－関心の与格(参照点)の tr/lm 認知による捉え直し－, 第1回認知文法研究会, 同志社大学 2012年3月17日
- ⑤ Koguma, Takeshi. “A Cognitive Account for Contact-verb Construction in Japanese: With Special Reference to Inverse Construction” ICLC11 (International Cognitive Linguistics Conference) Xi’an International Studies University, Xi’an, China, July 14, 2014.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小熊 猛 (KOGUMA Takeshi)  
宮崎大学・教育文化学部・准教授  
研究者番号：60311015

### (2) 研究分担者

田村 幸誠 (TAMURA Yukishige)  
滋賀大学・教育学部・准教授  
研究者番号：30397517

井筒 美津子 (IZUTSU Mitsuko)  
藤女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：00438334

川島 嘉美 (KAWABATA Yoshimi)  
石川工業高等専門学校・一般教育科・  
准教授  
研究者番号：70581172

### (3) 連携研究者

井筒 勝信 (IZUTSU Katsunobu)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：70322865